【論考】

学部レベルの海外留学経験がキャリアにもたらすインパクト
-学位取得目的，単位取得目的留学経験者と留学未経験者に対するオンライン調査結果の比較より-

Long-term Impact of Undergraduate Study Abroad Experiences on Career: Comparative Survey Results among Degree-seeking Study Abroad, Credit-bearing Study Abroad, and Non-study Abroad Groups

一橋大学大学院法学研究科専任講師　**新見　有紀子**
一橋大学大学院商学研究科専任講師　**秋庭　裕子**
一橋大学国際教育センター教授　**太田　浩**
明治大学国際日本学部教授　**横田　雅弘**
SHIMMI Yukiko
(Graduate School of Law, Hitotsubashi University)
AKIBA Hiroko
(Graduate School of Commerce and Management, Hitotsubashi University)
OTA Hiroshi
(Center for Global Education, Hitotsubashi University)
YOKOTA Masahiro
(School of Global Japanese Studies, Meiji University)

学部、海外留学経験、キャリア、海外留学

１．はじめに

近年、日本国内の大学に在学中に、数週間から1年間程度の短期留学をする学生の数が増加している。「学生交流に関する協定等に基づく留学者数」は2015年度に84,456名となり、前年の81,219名から約3,000名増加した（文部科学省，2017）。他方、海外の大学での学位取得を中心とする比較的長期の留学は、2000年代後半以降減少傾向にある。1年間以上の留学者数を計上するOECDの統計及び比較的長期での留学者をカウントする各受入れ国の統計資料をもとに文部科学省が集計する日本人の海外留学者数によると、2014年は53,197名であり、ピーク時（82,945：2004年）と比べて大きく減少した。このように日本人の留学パターンとしては、学位取得目的を中心とした長期の留学と、近年増加傾向の単位取得を目的とした短期の留学という2つの形態に大別できると考えられるが、これらの留学形態や期間の違いによって、留学のインパクトにはどのような差異が見られるのだろうか。

本稿では、2016年8月の『留学交流』（vol.65）において小林が「留学体験のインパクトと成果-留

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

学経験者と留学非経験者の比較調査から-」で報告した当該調査[1]から得られたデータを用いて、異なった観点から分析を行う。具体的には、学部レベルの海外留学経験者のうち、学位取得目的の留学と単位取得目的の留学という形態の違いに着目し、留学未経験者(国内大学卒業者)との比較も行いながら、留学の中長期的なインパクトを検証する。海外留学がキャリア形成やエンプロイアビリティ（employability: 雇用可能性）に与える影響についての関心が高まる中、本稿では、調査データのなかでも、キャリアに関する項目に焦点を当てて分析を行う[2]。

２． 先行研究

海外留学がその後のキャリアに与えるインパクトについての先行研究は、近年欧米で盛んに行われている。先行文献によると、留学経験者は、仕事上で国際的業務を担当する割合や、海外勤務を担う割合が高いというキャリア上の傾向が報告されている(Teichler & Jahr,2001;Wires-Jenssen,2008)。また、Janson et al.（2009）によると、大学在学中にERASMUS奨学金を受給し、海外留学を経験した者は、留学経験が卒業後に仕事を得るのに役立ったという自己評価をした割合が過半数に達した。また、イタリアにおける同種の大規模調査においても、海外留学がその後のエンプロイアビリティを高めたことが報告されている（Di Pietro, 2013)。米国においても、Franklin（2011）が行った調査では、回答者の73%が、留学経験は自身の市場価値を高めたと回答した。これらの調査結果から、海外留学経験は、留学後のエンプロイアビリティに概ね肯定的な影響があることを示唆している。その一方で、留学経験が、仕事における収入の増加や、収入に対する満足度を上げる効果は限定的であるという調査結果も報告されている（Schmidt & Pardo, 2012；Janson et al. 2009)。管見の限りでは、学位取得・単位取得目的別の留学のキャリア上のインパクトに関する文献は存在しなかったが、留学期間別では、Dwyer（2004）が、１年間、１セメスター、数週間の留学経験者の調査回答を比較しており、キャリア関連の項目（「キャリアパスに影響を与えるスキルを獲得した」、「キャリアの方向性における興味に火がついた」、「仕事上で活用する外国語の会話能力を向上させた」など）は、１年間の留学経験者の方が、他の短期留学経験者より自己評価が高いことが明らかになった。

これらの先行研究から、留学経験がキャリアにおける諸外国との接点を増やすことや、雇用可能性を向上させる効果があることが指摘できる一方、収入の満足度を高めることには必ずしもつながらないことが示唆されている。また、短期と長期の留学を比較すると、長期の方がキャリア上のインパクトは高いということが示されている。日本学生支援機構（2012）による、海外留学経験者に対する調

[1] 「グローバル人材育成と留学の長期的インパクトに関する国際比較研究」2013-2015年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（A)。調査結果の概要や関連する学会発表資料・出版物等については次のウェブサイトを参照のこと。http://recsie.or.jp/project/gj5000/

[2] 学位取得目的の留学と単位取得目的の留学の違いによる、能力・意識面におけるインパクトについては、新見・秋庭（2016)「学部レベルの海外留学経験が能力・意識の自己評価にもたらすインパクト」『留学生教育』21：37-44を参照のこと。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

査では、61.8%が「留学経験が就職活動や進路の決定に役立った」と回答しているが、留学とキャリアの関係について掘り下げた先行研究は限られており、留学経験者と未経験者の比較並びに、学位・単位取得目的・留学期間別などによる留学経験のインパクトの違いについて、さらなる研究が求められている。

３．調査の手法

3.1　本調査の目的

本調査は、日本人の留学経験がその後のキャリア形成や人生にどのようなインパクトを与えたかを明らかにし、日本におけるグローバル人材育成の課題と方向性を検証するために行われた。本稿では、特に留学後のキャリア形成並びに、人生とキャリアに対する満足度における自己評価に基づくインパクトについて分析を行った。

3.2　調査対象者と調査票内容

本稿の分析データを収集した回顧的追跡調査は、3 ヶ月以上の留学経験者を対象として、オンラインの質問票を作成し、研究関係者によるネットワーク及び、民間調査会社のモニターに周知する形で実施された。回答は 2014 年 12 月から 2015 年 5 月初旬まで受け付け、有効回答数 4,489 件が得られた。本稿では、このうち学士取得を目的とした留学経験者（以降、「学士留学」とする）については留学期間が 3 年以上の者 416 件、学部レベルでの単位取得またはその他の目的の留学経験者（以降、「単位・その他の留学」とする）については、留学期間が 3 ヶ月以上 1 年未満の者 757 件のデータを抽出し分析を行った[3]。さらに、比較対照群（留学未経験者群）として、3 ヶ月以上の海外留学や海外在住経験がない国内大学卒業者に対して[4]、2015 年 8 月から 9 月にかけて実施したオンライン調査から、710 件のデータを用いた。以上に述べた（1）学士留学、（2）単位・その他の留学、（3）国内大学卒業の 3 つのグループの属性を示したものが表 1 である。

表1　年代・性別による学部レベルの留学経験者と対照群の比較

		学士留学 (*n*=416)	単位・その他の留学 (*n*=757)	国内大学卒業 (*n*=710)
性別	男	218 (52.4%)	381 (50.3%)	334 (47.0%)
	女	198 (47.6%)	376 (49.7%)	376 (53.0%)
年代	50歳代以上	56 (13.5%)	89 (11.8%)	144 (20.3%)
	40歳代	175 (42.1%)	208 (27.5%)	244 (34.4%)
	30歳代	145 (34.9%)	264 (34.9%)	227 (32.0%)
	20歳代	40 (9.6%)	196 (25.9%)	95 (13.4%)

[3] 3 ヶ月以上の海外留学を複数回経験した者のうち、学部レベルでの留学を「最も重要な留学」として回答した者もこの中に含まれている。
[4] 留学経験者と同様に、民間調査会社のモニターを活用した。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

3.3　調査票内容・評価方法

調査票には海外留学のインパクトに関して様々な質問項目を設定したが、本稿ではそのうち、回答者の職位・年収を含むキャリアに関する属性に加え、海外留学のインパクトとしてキャリアへの影響（6項目）・採用への影響（4項目）、人生・仕事に関する満足度（6項目）に焦点を当てた（表2）。属性以外の項目については、リッカート法の4段階尺度（つよくそう思う・そう思う・あまりそう思わない・全くそう思わない）で回答者が自己評価に基づき応答した。

表2　本稿に関連した調査票質問項目の概要

	項目
キャリアに関する属性	現在の職位・年収
キャリアへの影響 （6項目）	キャリア設計の上で助けになった 現在の仕事に就く上で助けになった 現在の年収を高めるのに役立った 現在の仕事において留学で学んだ知識やスキルを使っている 起業しようという意欲が高まった（営利・非営利を含む） NPOや社会活動をしようという意欲が高まった
採用の際の評価 （4項目）	自分の留学経歴が評価された 留学で身につけた語学力が評価された 留学で学んだ知識やスキルが評価された 外国人とのコミュニケーション経験が評価された
満足度 （6項目）	現在の仕事に満足している 現在の収入に満足している 自分の留学経験に満足している 仕事以外のプライベートな生活に満足している 交友関係に満足している 人生に満足している

3.4　分析方法

本稿では、(1) 学士留学経験者、(2) 単位・その他の留学経験者、(3) 国内の大学卒業者それぞれのグループについて、リッカート法で得た回答を、「全くそう思わない」が1点、「つよくそう思う」が4点とする尺度を用い、加重平均値[5]を算出し比較分析を行った。さらに、3群での一元配置分散分析[6]と多重比較を行い、これらのグループ間の回答の統計的な有意差の有無を検証した。

４．調査結果

4.1　現在の職位と年収

表3は、現在の職位[7]と年収を示したものである。まず、現在の職位で、経営者・役員クラスに就い

[5] 平均値を計算する時、各項の数値にその重要度に比例した係数を掛け、各項に重みをつけてから平均値を算出すること。重みつき平均値。
[6] 一元配置分散分析は分散分析の一つである。分散分析とは3つ以上の標本（または変数）の平均の差を検定する手法で、パラメトリックな手法に分類される。要因が1で水準が3つ以上の時に、水準間である変数の平均の差を知りたい場合に一元配置分散分析を行う。
[7] 職位については、主婦（夫）・無職を除外したデータで分析を行った。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ている割合は、学士留学が14.2%であり、単位・その他の留学の7.6%の倍程度の割合となっているのに対し、国内大学卒業者は0.3%と非常に低かった。また、管理職クラスと経営者・役員クラスを合わせた管理職全体の比率においても、学士留学32.5%、単位・その他留学27.7%、国内大学卒業17.5%と、学士留学グループの割合が最も高かった。ただし、表1に示したように、学士留学の回答者は年齢が高い（40歳代以上が多い）傾向があるのに対し、単位・その他の留学の回答者は20代が相対的に多く含まれていたことから、学士留学経験者の高い年齢層が職位を高めている可能性を考慮する必要がある。実際に、40代のデータのみで比較すると、経営者・役員クラスについては、学士留学が15.9%、単位・その他の留学が3.6%とさらに差が大きい傾向にあったが、管理職クラスについては、学士留学が20.7%、単位・その他の留学が34.9%となっており、単位・その他の留学経験者の比率の方が高くなった。また、30代のデータのみで比較すると、経営者・役員クラスは、学士留学が8.8%、単位・その他の留学が9.2%と、単位・その他の留学の比率の方が若干高い結果となった。管理職クラスは学士留学が16.2%、単位・その他の留学が15.1%と、学士留学経験者の比率が高かった。

次に、現在の年収については、0～200万円から2,000万円以上までの間の8段階から選択してもらい、その平均値を3つのグループで示した。学士留学が547万円、単位・その他の留学が479.3万円、国内大学卒業が449.1万円となり、留学経験者の2つのグループが、国内の大学卒業者より年収の平均値が高かった。職位と同様に、学士留学回答者の高い年齢層が当該グループの年収レベルを高めている可能性は否定できない。また、対照群である国内大学卒業者の質問票調査においては、年収の項目については「答えたくない」という項目を追加したことも、集計結果に影響を与えていると考えられる。年収について、30代のデータのみで比較すると、学士留学は539.7万円、単位・その他の留学は439.0万円、国内大学卒業は353.3万円と、その差が大きくなる傾向に合ったが、40代だけで比較すると、学士留学は564.0万円、単位・その他の留学は546.2万円と差が小さかった（国内大学卒業は436.1万円）。

表3　現在の職位クラス・年収

		学士留学（n=416）	単位・その他の留学（n=757）	国内大学卒業（n=710）
現在の職位	経営者・役員クラス	14.2%	7.6%	0.3%
	管理職クラス	18.3%	20.1%	17.2%
	一般社員クラス	43.4%	54.3%	67.8%
	アルバイト・契約社員など	15.0%	12.4%	14.5%
	その他	9.1%	5.6%	0.2%
現在の年収		547.0万円	479.3万円	449.1万円
留学資金の支弁方法	給付奨学金	4.1%	37.5%	－
	私費	95.9%	62.5%	－

注1）現在の職位については、主婦・無職を除外し、学士留学（n=394）、単位・その他の留学（n=693）、国内大学卒業（n=574）にて集計。
注2）現在の年収について「答えたくない」という選択肢を対照群（留学未経験者）のみ設定した。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

4.2　キャリアに与える留学経験の影響

学部レベルの留学経験（対照群の場合、国内の大学での経験）がキャリアに関する6項目に与えた影響について、項目ごとに「全くそう思わない」の1点から「つよくそう思う」の4点までの4段階尺度で自己評価した回答を、3 つのグループごとに加重平均値を算出し、レーダーチャートで示したものが図1であり、一元配置分散分析を行った結果が表4である。キャリアに関する6項目すべてにおいて、学士留学と単位・その他留学の両グループの加重平均値は、 国内大学卒業者よりも統計的に有意に高かった。特に、「キャリア設計の上で助けになった」、「現在の仕事に就く上で助けになった」、「現在の仕事において留学（対照群では、国内大学）で学んだ知識やスキルを使っている」の3項目において、留学経験者は対照群より平均値が0.5ポイント以上高くなっており、留学経験のキャリア面での影響と、留学で得た知識とスキルの活用を肯定的に捉えていた。

また、留学経験は起業意欲や社会貢献への意欲を高めるのではないかと仮定していたが、「起業しようという意欲が高まった」、「NPO や社会活動をしようという意欲が高まった」という2項目については、キャリアに関する他の項目に比べて加重平均値が低かった。日本では未だ起業家精神や社会貢献活動の土壌が発展途上であるという背景を反映していると推測されるが、それでも国内大学卒業者と比べると数値は0.5ポイント程度高く、留学経験が起業意欲や社会貢献への意欲に限定的ながら影響を与えていることが読み取れる。「起業意欲」と「社会貢献への意欲」の2項目と同様に、平均値が低い項目として、「現在の年収を高めるのに役立った」が挙げられる。学士留学と単位・その他留学のグループは、国内大学卒業者のグループよりも平均年収が高い傾向にあった（表3）にもかかわらず、留学経験が現在の年収を高めるのに役立ったと肯定的には認識していないことが分かる。

学士留学と単位・その他の留学経験者の回答を比較すると、「NPO や社会活動への意欲が高まった」を除く5項目において、学士留学の平均値の方が単位・その他の留学よりも高く、統計的に有意な差も確認された。学士留学経験者の方が、単位・その他の留学経験者よりも、留学経験のキャリアに関する影響が大きい傾向が示された。また、起業への意欲については、学士留学経験者の方が単位・その他留学に比べて統計的に有意で平均値が高かった一方、NPO や社会活動への意欲については両グループ間の有意な差異は認められなかった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

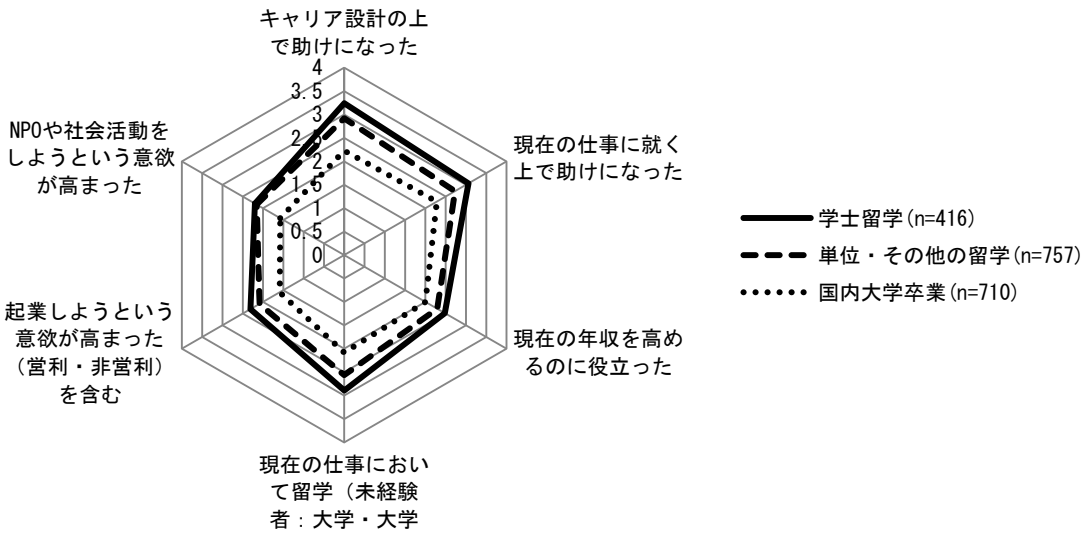

図1　キャリアに関する自己評価

表4 キャリアへの影響に関する項目の平均値、標準偏差、分散分析、多重比較

	1. 学士留学 (*n* = 416)		2. 単位・その他の留学 (*n* = 757)		3. 国内大学卒業 (*n* = 710)		*F*値	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
キャリア設計の上で助けになった	3.24	0.852	2.92	0.875	2.23	0.819	218.13*	1 > 2 > 3
現在の仕事に就く上で助けになった	3.06	0.989	2.73	1.008	2.28	0.902	92.26*	1 > 2 > 3
現在の年収を高めるのに役立った	2.48	1.013	2.29	0.969	2.00	0.801	39.10*	1 > 2 > 3
現在の仕事において留学（未経験者は大学）で学んだ知識やスキルを使っている	2.89	0.976	2.56	1.001	2.08	0.851	103.70*	1 > 2 > 3
起業しようという意欲が高まった(営利･非営利を含む)	2.31	1.023	2.09	0.995	1.59	0.698	97.60*	1 > 2 > 3
NPO や社会活動をしようという意欲が高まった	2.20	0.967	2.16	0.939	1.58	0.675	106.63*	1 = 2 > 3

注1）*p <.001
注2）グループ間自由度はいずれも2、グループ内自由度は1,880。
注3）多重比較はGames-Howell法（有意水準は5%）の結果を記載。2つの次元間の有意差を不等号で示した。

4.3　採用に与える留学経験の影響

図2は、学部レベルの留学経験（対照群の場合、国内の大学での経験）が、採用に関する4項目に与えた影響について、項目ごとに「全くそう思わない」の1点から「つよくそう思う」の4点までの4段階尺度で自己評価した回答を、3つのグループごとに加重平均値を算出し、レーダーチャートで示したものである。また、それぞれのグループの平均値について、一元配置分散分析を行った結果が表5である。学士留学と単位・その他留学の両グループの加重平均値は、4項目すべてにおいて対照群よ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

りも統計的に有意に高かった。中でも、「留学で身につけた語学力（対照群では、外国語運用能力）が評価された」および「外国人とのコミュニケーション経験が評価された」の2項目において、対照群より1ポイント以上加重平均値が高くなっており、海外留学経験そのものよりも、留学で身に付けた語学力と留学先での多様な人々とのつながりから得たコミュニケーション能力が採用時に評価されたと前向きに認識していた。さらに、4項目すべてにおいて学士留学の平均値の方が単位・その他の留学よりも高かったことから、採用時の留学に関する評価は、留学経験者の中でも、特に学士留学経験者の方が強く実感していることが傾向として示された。

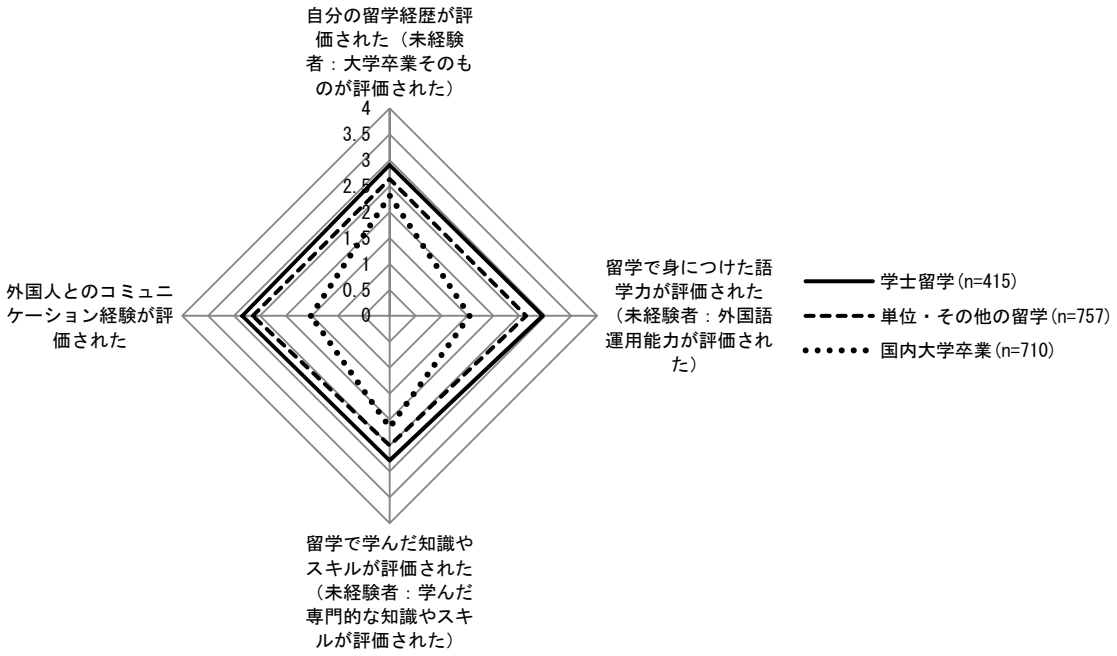

図2　採用に関する自己評価

表5 採用に与える留学経験の影響に関する項目の平均値、標準偏差、分散分析、多重比較

	1. 学士留学（n = 416）		2. 単位・その他の留学（n = 757）		3. 国内学部卒業（n = 710）		F値	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
自分の留学経歴（未経験者は大学卒業）が評価された	2.91	0.959	2.64	0.949	2.32	0.834	58.27*	1 > 2 > 3
留学で身につけた語学力（未経験者は外国語能力）が評価された	2.95	0.968	2.63	0.96	1.54	0.611	466.97*	1 > 2 > 3
留学で学んだ知識やスキル（未経験者は学んだ専門的な知識やスキル）が評価された	2.79	0.973	2.5	0.942	2.15	0.803	69.09*	1 > 2 > 3
外国人とのコミュニケーション経験が評価された	2.84	0.977	2.64	0.962	1.52	0.607	439.73*	1 > 2 > 3

注1）*p <.001
注2）グループ間自由度はいずれも2、グループ内自由度は1879。
注3）多重比較はGames-Howell法（有意水準は5%）の結果を記載。2つの次元間の有意差を不等号で示した。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

4.4　人生や仕事等の満足度に関する影響

学部レベルの留学経験（対照群の場合、国内の大学での経験）が人生や仕事の満足度に関する6項目に与えた影響について、項目ごとに「全くそう思わない」の1点から「つよくそう思う」の4点までの4段階尺度で自己評価した回答を、3つのグループごとに加重平均値を求め、レーダーチャートで示したものが、図3であり、一元配置分散分析を行った結果が表6である。学士留学と単位・その他留学の2つの留学グループの加重平均値は、人生や仕事等の満足度に関する6項目すべてにおいて対照群よりも高く、特に「現在の仕事に満足している」、「仕事以外のプライベートな生活に満足している」、「交友関係に満足している」、「人生に満足している」の4項目については、統計的な有意差が認められた。しかし、満足度に関する各項目の平均値を単純に比較すると先述のキャリアや採用に関する項目に比べてその差異は小さかった。上記4項目について、学士留学と単位・その他留学のグループ間での有意な差異は認められず、人生や仕事等に関する満足度は両者間で変わらないと言える。「留学（対照群では、国内大学の）経験に満足している」については、留学経験者の2グループが留学未経験者よりも有意に高く、さらに学士留学経験者が、単位・その他留学経験者よりも有意に高かった。

また、「現在の仕事に満足している」、「現在の収入に満足している」という仕事や収入に関する満足度は、3つのグループともに、その他の満足度に関する項目と比べて平均値が低かった。「現在の収入に満足している」については、留学経験者のうち、単位・その他の留学の方が学士留学や国内大学卒業者よりも平均値が有意に高かったが、学士留学経験者と留学未経験者の間には有意な差異が見出せなかった。先述のとおり、留学経験者の2グループは年収が高かったにもかかわらず、現在の仕事と収入についてはあまり満足していないことが浮彫りになった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

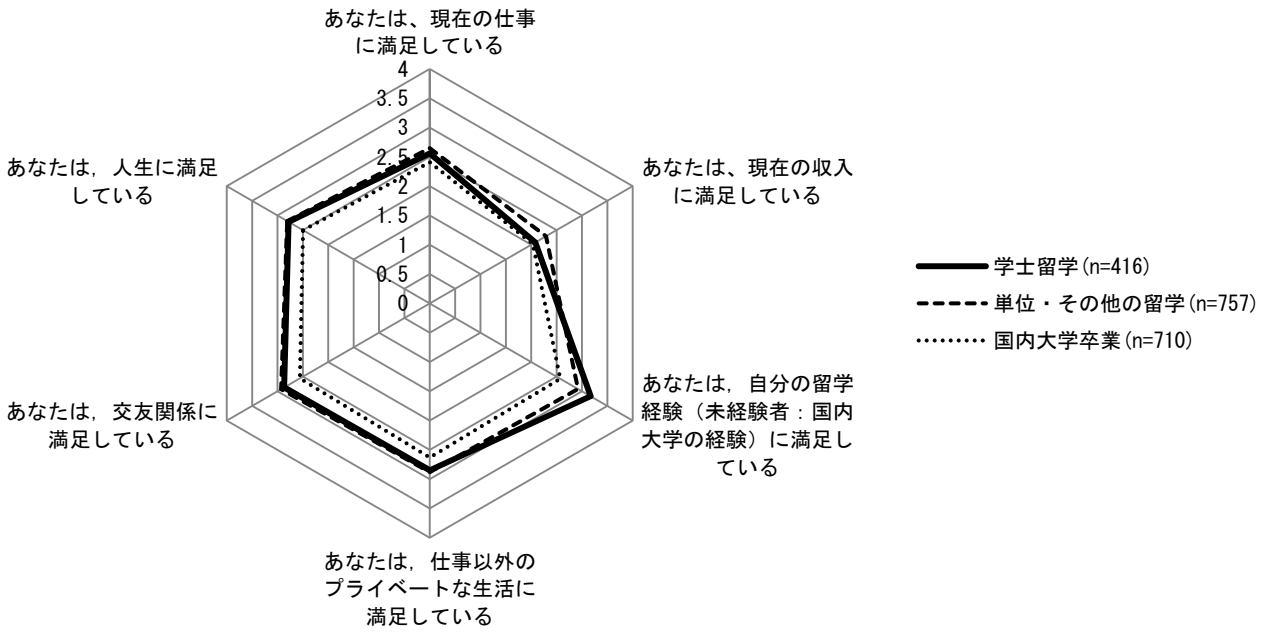

図3　満足度に関する自己評価

表6 満足度に関する項目の平均値、標準偏差、分散分析、多重比較

	1. 学士留学 (n = 416)		2. 単位・その他の留学 (n = 757)		3. 国内学部卒業 (n = 710)		F値	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
あなたは、現在の仕事に満足している。	2.56	0.945	2.65	0.884	2.41	0.811	13.26*	2 = 1 > 3
あなたは、現在の収入に満足している。	2.08	0.887	2.29	0.895	2.03	0.780	18.59*	2 > 1= 3
あなたは、自分の留学（未経験者は国内大学）経験に満足している。	3.17	0.817	2.92	0.801	2.57	0.804	78.15*	1 > 2 > 3
あなたは、仕事以外のプライベートな生活に満足している。	2.85	0.806	2.88	0.768	2.63	0.765	20.02*	1 = 2 > 3
あなたは、交友関係に満足している。	2.87	0.794	2.93	0.751	2.56	0.714	48.34*	1 = 2 > 3
あなたは、人生に満足している。	2.78	0.809	2.81	0.780	2.50	0.760	32.12*	1 = 2 > 3

注1）$^*p < .001$
注2）グループ間自由度はいずれも2、グループ内自由度は1,880。
注3）多重比較はGames-Howell法（有意水準は5%）の結果を記載。2つの次元間の有意差を不等号で示した。

５．考察

5.1　調査結果のまとめと考察

本稿では、3ヶ月以上の留学経験がもたらすキャリアに関するインパクトについて、大規模なオンライン調査の結果から、学部レベルの学士留学と単位・その他留学の2グループのデータを抽出し、対照群（留学未経験者）として国内大学卒業者を対象とした調査のデータと比較分析を行った。まず、現在の職位については、留学経験者の方が留学未経験者よりも高いという傾向が見出せた。特に、管理職全体の比率は、学士留学経験者の割合が高く、留学経験者は仕事上で責任ある立場に就いている

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

割合が高いことがわかった。起業をしようという意欲についても、留学経験者の方が留学未経験者に比べて高かったが、留学後に自ら事業を立ち上げて、経営の責任者となる場合も多いのではないかと考えられる。さらに、現在の年収についても、留学経験者の方が、未経験者よりも高かった。特に学士留学経験者は、単位・その他の留学経験者と比べて70万円近く、また留学未経験者と比較して100万円近く高かった。留学経験者は、年収が高い傾向にある外資系企業に勤めている割合が高い[8]ことも、その一因とみられる。学士留学経験者は、単位・その他の留学経験者より高い年齢層の回答の割合が大きいという点を考慮する必要があるが、留学経験は職位や年収の向上に肯定的なインパクトを与えることが示唆された。

留学経験者の2つのグループは現在の年収の平均値が、留学未経験者と比較して高かったにもかかわらず、現在の収入に対する満足度は低く、特に学士留学経験者にその傾向が見られた。先行研究で述べた通り、欧米では留学経験が、仕事における収入の増加及び、収入に対する満足度の向上には繋がらないとする調査結果が報告されているが、日本人の海外留学に関する本調査では、留学経験者の収入は未経験者に比べて高い傾向にあったものの、収入に対する満足度は高くないという、少々異なった結果となった。日本では、終身雇用制度を前提とした年功序列型賃金体系（勤続給）が未だ主流であり、成果主義に基づく能力給や職能給が広く普及していないことが影響していると思われる。また、本調査の学士留学経験者は，回答者の約9割以上が私費留学であったことから、留学費用に見合った収入が得られていないと感じている可能性も考えられる。

留学経験者における収入の満足度は高くなかった一方で、現在の仕事、仕事以外のプライベートな生活、交友関係、人生の満足度については、留学未経験者よりも高かった。このことは、留学経験者が、留学によってもたらされた非金銭的なベネフィットを享受することにより、仕事や人生などにおいて満たされていると感じている可能性を示唆している。欧州における調査でも、留学経験者の中には、高い収入が見込める仕事よりも、仕事のやりがいや充実感など収入面以外を重視しているという結果が報告されている（European Commission, 2014）。日本人の海外留学経験者についても、留学経験の影響として、非金銭的な充足度を高める傾向が見出せたと言えるのではないだろうか。

また、留学期間の長い学士留学経験者の方が、単位・その他の留学経験者よりもキャリア形成上で留学経験をより活用し、採用時にその留学経験から得た外国語運用能力やコミュニケーション能力が高く評価されるなどの効果を実感しており、留学経験に対する満足度も高かった。他方、単位・その他の留学経験者は、学士留学と比較して留学期間が短いにも関わらず、仕事やプライベート、人生における満足度について、学士留学と同程度の肯定的な自己評価が確認された。この種の留学経験者は、職位・年収、キャリア形成に関する自己評価、採用時の評価において学士留学経験者に比べて留学の

[8] 外資系企業に勤めている者の割合（主婦・無職を除く）は、学士留学で24.6%、単位・その他の留学で11.4%、国内大学卒業で2.4%であった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

インパクトが弱い部分も見受けられるが、留学期間が短いことで経済的負担が少なくて済むことや、現在の収入に関する満足度は学士留学よりも高いことから、学士留学とは異なった役割や意義があり、キャリア面でも肯定的に影響していると言える。

5.2 最後に

本稿の分析結果から、留学経験はキャリア形成上に肯定的な効果があるとともに、キャリアを越えて人生を満ち足りたものとする効果が実感されていることが明らかになった。さらに、単位取得を目的とした比較的短期の留学経験も、学士取得を目的とした長期留学と同程度のインパクトをもたらし得るキャリア上の領域があることも確認された。これらの結果は、日本におけるグローバル人材の育成や、日本人学生の海外派遣推進の動向を肯定的に裏付けるものでもある。また、本調査の学士留学の回答者は、約9割以上が私費留学であると回答しているが、本稿の分析から見られた年収の高さやキャリアへのポジティブな影響を考慮すると、学位取得を目的とした留学とキャリア形成を支援することのできる奨学金などの経済的援助や留学支援体制の整備をより拡充していく必要がある。起業意欲と社会活動への意欲については、国内大学卒業者に比べると、海外留学経験者2グループが高かったものの、仮定していたほど高くはなかったことから、より起業や社会貢献活動を後押しするような環境整備が、今後のグローバル人材の育成、国際競争力の醸成という観点からも重要であると思われる。本調査結果が、海外留学とキャリア形成を促進する教育プログラムの開発や学生派遣促進の一助となることを期待したい。

引用文献

Di Pietro, G. (2013). Do study abroad programs enhance the employability of graduates? (IZA Discussion Paper No. 7675). Bonn, Germany: IZA - Institute for the Study of Labor.

Dwyer, M. M. (2004). More is better: The impact of study abroad program duration. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, *10*, 151-163.

European Commission. (2014). *The ERASMUS impact study: Effects of mobility on the skills and employability of students and the internationalisation of higher education institutions*. Retrieved from http://ec.europa.eu/dgs/education_culture/repository/education/library/study/2014/erasmus-impact_en.pdf (2017年5月8日閲覧)

Franklin, K. (2010). Long-term career impact and professional applicability of the study abroad experience. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, *19*, 169-

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

190.

Janson, K., Schomburg, H., & Teichler, U. (2009). *The professional value of ERASMUS mobility: The impact of international experience on former students' and on teachers' careers*. Bonn: Lemmens.

Schmidt, S., & Pardo, M. (2012, April 17). *The contribution of study abroad to human capital for United States college students* (Preliminary). Union College, Schenectady, NY.

Teichler, U., & Jahr, V. (2001). Mobility during the course of study and after graduation. *European Journal of Education*, *36*(4), 443-458.

Wiers-Jenssen, J. (2008). Does higher education attained abroad lead to international jobs? *Journal of Studies in International Education*, *12*(2), 101-130.

新見有紀子・秋庭裕子（2016)「学部レベルの海外留学経験が能力・意識の自己評価にもたらすインパクト：学位取得目的，単位取得目的留学経験者と留学未経験者に対するオンライン調査結果の比較より」『留学生教育』

日本学生支援機構（2012）『平成23年度「海外留学経験者追跡調査」報告書：海外留学に関するアンケート』http://ryugaku.jasso.go.jp/link/link_statistics/link_statistics_2012/（2017年4月30日閲覧）

文部科学省（2017）「「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について」http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm（2017年4月30日閲覧）

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.